

「創造的人間」と創価大学の使命

勘 坂 純 市

「創造的人間たれ」——池田大作は、創価大学第3回入学式で学生たちにこう呼びかけた。彼は、その講演の中で、ルネサンスの源流となった中世ヨーロッパの大学、さらには、インドのナーランダー、ギリシャのアカメディアをあげて、そうした大学は、すべて「人間のもつ潜在的な可能性を引き出し、開発し、アウフヘーベンさせる哲学」を基盤としていたことを強調している。そのうえで池田は、「生命・人間を直視し、その開発を目指したところに、学問の自由な発達があり、ひいては、文明の絢爛たる開化があった」とのべ、「創造性の鍵は、まさにこの一点にある」と指摘する⁽¹⁾。

「人間のもつ潜在的な可能性」、つまり、そこに集う学生一人ひとりがもつ可能性を開花させることこそが、池田にとっては大学の生命線であった。そのことは、彼が、創価大学の建学の理念の冒頭に「人間教育の最高学府たれ」を掲げたことにも端的に示されている。こうした「創造的人間」の育成は、大学の設立当初もしくはそれ以前から池田の念頭にあったと思われる。創価大学の設立の構想を発表した席で、彼は次のように述べている⁽²⁾。

真に役立つ人材とは、単に知識や技術に優れた人間ではない。それだけであっては、国家社会の巨大なメカニズムの一部を構成する部品に過ぎない。真に望まれる人材とは、高い理念をもった優れた人格者であり、豊かな個性をもち、そのうえで学問、技術を使いこなしていける革新的にして創造的な人間であると考えますが、いかがでありますでしょうか。(傍点引用者)⁽³⁾

もちろん池田は「知識や技術」といった専門理論の基礎的なトレーニングを学生が受けることの意義を否定しない。むしろそれは、彼自身が強調するところでもある。先の第3回入学式の講演で、池田は、「一つのアイデアを生むことさえも、それには基礎からの十分な積み重ねが要求されます」と指摘した上で、学問における創造は、それとは比較にならないほどの基礎的な力量が要

⁽¹⁾ 池田大作「創造的人間たれ」創価大学学生自治会『創立者の語らい』第1巻所収、60-61頁。

⁽²⁾ 創価大学設立前後の池田の言説が、大学紛争を背景とした当時の時代の中でどのような意味を持っていたかについては、伊藤貴雄の興味深い論考（「池田平和思想の研究Ⅰ—大熊信行との対話に注目しつつ（第1回）：大学紛争論」）がすでに発表されている。ぜひ参照されたい。

⁽³⁾ 池田大作「創価大学設立構想」1968年5月3日第31回創価学会本部総会での講演（『創立者の語らい』第1巻、26頁）。

求されるのはいうまでもありません⁽⁴⁾と述べている。

このような「基礎的な力量」を養うために大学はもっとも適切な場である。しかし残念ながら、現在の大学は、それを基盤とした創造性を発揮することができていない。「現在の大学の一般傾向は、こうした条件に恵まれているにもかかわらず、創造性への意欲は乏しいとも言えるのではないのでしょうか。とくに、創造的人格を形成していく場とはなっていません⁽⁵⁾」と池田は指摘する。しかし、それは彼にとっての本来の大学の姿ではなかった。東西の文明の源流を形成した大学、すなわち、中世ヨーロッパの大学も、インドのナーランダーも、ギリシャのアカメディアも、まさに「創造的人格を形成していく場」であった。この本来の大学の姿を示し、創価大学をそうした創造的人間の育成の場とすることを、池田は先の講演で訴えたのである。

このように、学生の可能性の開発する「人間教育」を建学の理念に掲げることは、教育よりも研究を重視しがちな既存の大学に対する、ひとつの挑戦であった。近年、教育機関としての大学のあり方が重視される中で、池田がすでに30年以上前に、大学での「人間教育」を掲げた先駆性を指摘する意見も多い。しかし、池田の「創造的人間たれ」という指針は、単に“研究でなく教育”という次元に留まらない。それは、彼の学問・研究のあり方を含めた、まさに、学問観・大学像そのものへの問いかけになっていること見落としてはならない。すなわち、われわれはそこに、一人ひとりの人間の可能性、創造性の開花こそが、歴史を拓く鍵であるという池田の一貫した哲学があることを知らなくてはならない。

かつて筆者は、池田の「人間主義」は、あくまで一人ひとりの人間がもつ可能性を開いていくことを出発点とすると述べた⁽⁶⁾。一人ひとりが潜在的にもつ力を開いていくことなしに、いかに「高度な」理論を展開しても現実の課題を解決することはできない。現実の問題を解決するのは、あくまでも人間の知恵であって抽象的な理論ではないからだ。逆に、すべての問題を解決するかに見える「完璧な」理論があれば、人間が創造性を発揮する余地はまったくない。クレアモント・マッケナ大学での講演「新しき統合原理を求めて」(1993年)で、池田は「何らかの『歴史的必然性』に基づく世界観は、ともすれば、人間が自らの行動によって運命を切り開いていく力を否定してしまう傾向にあるとは言えないでしょうか⁽⁷⁾」と述べた。社会の仕組みを、そして、歴史の行方を「完璧に」解き明かすという理論があるとすれば、人間は単なる理論の駒になりかねない。そうした万能の理論など存在しないのだ。むしろ、求めるべきは、「人間が自らの行動によって運命を切り開いていく力」の発揮、すなわち人間の創造性の開発である。池田が、創価大学に求めたのは、そうした創造的人間の育成の場、すなわち「人間教育の最高学府」であった。

では、池田は、創価大学において研究・教育が具体的にどのように行われるべきであると考えて

(4) 池田大作「創造的人間たれ」『創立者の語らい』第1巻所収、58頁。

(5) 池田大作「創造的人間たれ」『創立者の語らい』第1巻所収、58頁。

(6) 勘坂純市「人間主義を学ぶ―池田・ゴルバチョフ対談『二十世紀の精神の教訓』から―」『創価教育研究』第4号所収、2005年。

(7) 池田大作『海外諸大学講演集・21世紀文明と大乘仏教』聖教新聞社、1996年、54頁。

いたのだろうか。研究と教育の関係を考える際、通常考えられるのは、まず、現実の問題解決を模索する“研究”が行われ、その成果を伝えて専門家を養成する“教育”が行われるという関係があるろう。それを、あえて図式的に示せば以下ようになる。

理論

↓ 専門家（人間）

現実

この場合、通常理論、もしくは、創価大学に在籍する研究者が作り上げた「画期的な」理論が教育によって学生たちに伝えられ、学生たちはその「専門家」として、その理論を現実に適用していくことになる。

しかし、こうした「専門家」の育成が、池田の目指す創価大学の目的ではないはずだ。彼が創価大学設立構想で述べていたように、求められる人材は、「単に知識や技術に優れた人間」ではない。もちろん筆者も学生が専門理論のトレーニングを受けることの意味を否定するつもりはない。その必要性は、誰よりも池田が強調したことも先に指摘した通りである。だが、一方で、池田が示した「人間主義」の知見、すなわち、現実の問題を解決するのは抽象的な理論ではなく、一人ひとりの人間の知恵であるという知見に立つとき、われわれは、まず問題解決の“研究”が行われ、その成果を“教育”が伝えるという関係自体を見直す必要があるのではないだろうか。すなわち、人間は決して単に理論を現実に適用するだけの存在ではない。むしろ、人間こそが現実の問題を解決してゆく主体である。理論（知識）は、こうした知恵の働きを助けることはできるが、それ自身が問題を解決することはない。だとすれば、人間と理論の位置は、以下のように、先の図式とは反対となる。

人間（知恵）

↓ 理論（知識）

現実

そして、このように、現実の一つひとつの問題を解決する知恵を発揮する人間こそ「創造的人間」に他ならない。こうした視点にたつとき、大学における教育が単に専門知識を伝達するためだけにあるのではないことは明らかだ。現実の様々な問題を解決しようとする諸研究も、研究者による理論の体系化としてだけで完結することはない。それは、具体的な現実の問題に対して自在に知恵を発揮する「創造的人間」の教育なしには成り立ち得ない。理論は、こうした「創造的人間」の存在があつてはじめてその意義を見出すことができる。池田が、創価大学の設立構想で、すでに述べていた通り、「真に望まれる人材とは、高い理念をもった優れた人格者であり、豊かな個性をもち、そのうえで学問、技術を使いこなしていける革新的にして創造的人間」である。

さらに、池田は、理論をもちいながら現実の問題を解決する知恵の役割を、第4回入学式の講演「創造的生命の開花を」のなかで、ジョルジュ・フリードマンの『力と知恵』⁽⁸⁾を参照しながら明らかにしている。ここで「力」とは人間が技術の開発、発展によって得てきた環境の支配の力であり、本稿の文脈では理論・知識に当たる。これに対し、「知恵」とは、この“力”を使いこなし、人間の幸福のために価値創造していく英知⁽⁹⁾をさす。興味深いのは、池田が、近代日本の大学教育が「あまりにも“力”に偏った指向性があった」と指摘している点である。その結果、わが国の大学教育は、「本来、教育の生命である個々の人間の尊重、人間の尊厳の樹立という一点を失って」しまった。これに対し、池田は、創価大学の学生に対して、彼らの使命は、「あらゆる“力”を人間の幸福と平和のために使いこなす“知恵”を、身につけることであると」呼びかけた。こうした“知恵”をもった人格こそ「創造的人間」に他ならない。

池田は1994年のモスクワ大学での講演⁽⁹⁾で、牧口常三郎（創価学会初代会長）の「人道的競争」を引用し、世界は、「人格形成の競い合い、いうなれば『世界市民』輩出の競争」をおこなって行くべきであると指摘した。池田が、創価大学こそが人道的競争の先頭にたち、「創造的人間」をさらに輩出しゆくことを期待していることはいうまでもない。

⁽⁸⁾ ジョルジュ・フリードマンの『力と知恵』中岡哲郎・竹内成明訳、人文書院、1973年。

⁽⁹⁾ 池田大作「人間——大いなるコスモス」1994年5月27日。